

生成と蕩尽のあいだで

夏生まれ、夏好きの九州男児を高言する私ですが、今年の夏にはすっかりやられ、胃腸炎になって朝方に救急病院に駆け込んだりして、すでにして夏バテの朦朧とした毎日を送っています。ちゃんとしたレジュメを作ろうとも思いましたが、とうてい無理なようで、手紙の形で簡略に考えを述べます。秋に学会発表を控え、その覚書きにでもなれば、と。

そんな現況ですので、村田先生をはじめとして他の諸先生方のレジュメに1つ1つ対応することができておりません。いつの間にかメールが溜まっていて、驚いております。それらの件にかんしては当日までに考えをまとめて行くつもりです。

私の主張は、要約すると端的に1つで「成り行くことは成り行きではない」。それを以下で説明します。やや長くなりましたので、貼付ファイルでお送りします。

*

私が大学院の頃、初めて学会発表した際のテーマが「生成と蕩尽——ベルクソンとバタイユ」というもので、ベルクソンを生成の哲学者、バタイユを蕩尽の思想家と決めつけ、「笑い」というモチーフにおいて、それがどんな違いを生むか考察しました。

その時点ではバタイユの悲劇的思考を良しとしましたが、ベルクソンにたいする理解が深まるにつれ、見方が逆転しました。ベルクソンの中には生成も蕩尽もあるのに、バタイユは生成を斥け、蕩尽に固執する。偏頗で、これでは人間および文明生成の理路を解明できない。

バタイユには『呪われた部分』を始めとする独自の文明論がありますが、文明が立ち上がる生起の次元を説得的に説明できていない。

コジェーヴ経由で、我知らずハイデガー存在論を受け入れていたバタイユは、存在の開示というイメージに魅せられている。存在は開示されるか、しからずんば無で、そこには生成の次元がない。それを言語化することができず、ポエジーとしてしか語れない。

そんな思考の構えは進化論、ひいては進化そのものの問題系をそっくり取り逃がし、生命一般を具体的に主題化する途を閉ざしてしまう。何かとえば「生命」と口走るのに、そ

れがたんなるエロティシズムに還元され、ようはオス&メスのセックスの神秘みたいな話になる。生命世界の全体を眺望するような視座がなく、人間の枠組みから出られない。かくして彼は悪い意味で「文学」に留まることになった。

これに比べ、ベルクソンの思考の枠組みの方がはるかに大きい。それに気づき、もっぱらベルクソン研究に専念するようになりました。とはいえ、それと対照的な蕩尽の思考が常に念頭にあった。何と云ってもバタイユには《悪》の魅力がある。それはベルクソンには求めようもないものです。ベルクソンのテキストを、ある意味で非ベルクソンの視座から読む。その意味で私のベルクソン研究は、あくまでベルクソンに対して批評的です。

さらに言えば、私が狙っていたのはベルクソンの個別研究などではなく、ベルクソニズムと総称されるような一時代のヨーロッパの思考、ひとことで言えば「靈性」の思考であり、オウム真理教の事件以来、日本において壊滅的になった宗教性をいかに捉え直すべきか考えていた。その限りでフランスの現代思想にも興味を持った。これは論理性や合理性を発達させれば世の中が丸く収まるはずだ、というような素朴な啓蒙主義とは最初から縁もゆかりもない立場でした。

「生成」はフランス語では *devenir*、英語では *becoming* という語を用いるのが普通です。それは「成ること」「成り行くこと」です。これにたいして蕩尽 (*consummation, dépense*) とは、成り上がったものが自らを滅ぼし解体して行くことを意味します。ベルクソンにしてもバタイユにしても、この2つの過程が同時に生じる場所のことを知悉していました。それは存在開示の場所であると、とりあえずは言えます。

ベルクソンはそこに開かれる未発の多様性を潜在性と呼び、実在性や可能性と区別しました。可能性という迂路を経ることなく、自らの力で実在するに至るのが潜在性であり、それは実現されるやまた潜在性の領野へ沈み込んで行く。その全容を私たちが目にすることはありません。定義からして潜在的なものは実在的なものでは全くなく、未知なるもの、あくまでも未来において実現を待ち続けるものでしかない。潜在性という概念を導入することでベルクソンはアリストテレス的な存在論と袂を分かちます。

人類が存続する間に現前することなき未聞の潜在性が、我々の前途に待つとすれば、それらを解明しうる学問を、あるいは数学を我々は持ちうるか？ベルクソンの答えは「否」でした。そんな彼のことをラッセルは「反知性主義」と罵ったわけですが、知性の限界を見つめるベルクソンの認識は、もっと深刻で深甚なものです。

ベルクソンは「未来」という言葉を使うのを嫌った。そこに目的論が入り込むのを避けよ

うとしたのだと思いますが、先年ハンス・ヨナスを読んで、やはり未来という概念を積極的に用いるべきだと私は考えるようになりました。

このように、ひとことで「成ること」と言っても、実際には多様な要素が流れ込んでいる。成り切らずに終焉するものもあれば、成り果てて頑強に存続するものもあるはずです。

そんな混交の様子をベルクソンは相互浸透と呼びましたが、その具体的な有り様に理論的に迫ると言うより、物理学や生物学や脳科学の言葉を借り、自らの認識を語ろうと試みた。ベルクソンの理論は純理論的に見ると物足りない部分を残す。あまりに抽象的になるのを避け、あえて余白を残した、とも言える。これはベルクソンが記号=言葉を信じなかったことに由来する。

ベルクソンから影響を受けつつ、ホワイトヘッドは独自の理論体系を築きあげた。特に注目すべきことは、かれが哲学史にたいする自らの貢献を生成ではなく、消滅の分析にあると考えていたことです。有機体の哲学とは生成し、自らを満たし、やがて消滅に至るアクチュアル・エンティティの履歴の全容を解明し、概念的に把握することである。

アクチュアル・エンティティは消滅を運命づけられている。とはいえ、いちど実現したものの目の前から消え去っても、いわば不可視のかたちで存続するとホワイトヘッドは強調する。この点はベルクソンと共通します。同時代のフロイトにも同様の過去の存続の理論があることを言い添えておくべきでしょう。

ベルクソンの場合は潜在性、いいかえれば記憶に過去のイメージは沈殿し、想起されるのを待つと見なすことができます。そのテキストの中に、そうした論理を読み取ることが可能です。それはベルクソン独特の脳の理論としても展開される。

ところがホワイトヘッド哲学ではその点が曖昧です。眼前から消滅したアクチュアル・エンティティの痕跡はどこに保存され、いかにして想起されるか。記憶や想起の理論がホワイトヘッドには見当たらない。もっぱらそれは「永遠的客体」にまつわる議論として展開されますが、これで万人を納得させるのは難しかろうと思われる。この難点をホワイトヘッド学会において私は何度となく取り上げてきました。が、残念ながらほとんど反応がない。まったく理解されていないようです。

くり返しになりますが、「成り行くもの」は成り終えたものとしての過去、成りつつあるものとしての現在、成ることが呼び寄せられる未来という複数の時間層のなかで、その緊張を孕んだ流れのなかで生成変化する。それは空間なき空間、場所なき場所である。そう

した生成の次元を「成り行き」としてのみ理解するのでは、ベルクソンやホワイトヘッドの時間論の神髄に触れたことにはならない。

この「成り終えたもの」の問題は、ホワイトヘッドのなかでは「頑固な事実」とも呼ばれます。生成したものが速やかに消滅すると片づけるだけでは楽観的すぎる。生成を終えたにもかかわらず、必ずしも消滅には至らない残余、その「頑固な事実」こそがリアルなもののリアリティを形成する。

別の言い方をすれば、具体的なものに触れるとは、漠然とした成り行きを差異化し、その諸相と全容を把握することです。その出発点とすべきは、万象は消滅するという諦念でしょう。覚悟と言ってもいいかもしれない。

にもかかわらず、そこから出発しようとする者がほとんど見当たらない。これはホワイトヘッド学会の問題であるばかりか、日本における哲学研究の問題であり、また日本の経営学の問題でもあって、戦後日本の学術一般に通じる問題でもある。その背景には「世代」の問題が伏在しているのではないかと私は睨んでいます。

あらゆる経営は破綻する。あらゆる企業は衰亡する。あらゆる企て（enterprise）は失敗に終わる。それを前提にしない経営学など有りそうにないと思うのですが、現実には全くそうではない。「何とかなるはずだ」「何とかしましょう」の哲学が広く瀰漫している。

経営学はそうかもしれないが、哲学は違う。ハイデガーの哲学は「死の哲学」であり、消滅を前提とすると恐らく日本の哲学者は主張するでしょう。しかるにそれは自らの限界に突き当たって碎ける、英雄的な若者の思考であり、ハイデガーはそれをナチス擁護のレトリックとして用いた。田辺元にしても同様です。

私が近年ホワイトヘッド学会において嫌われながらも常々主張しているのは「死は必ずしも大きな問題ではない、死んでしまえばむしろ楽ちんだ。本当の問題は老化であり、劣化であり、衰退である」という頑固な事実です。近代の哲学は《老》の問題に向き合っていない。ヨーロッパ全体を見渡しても、せいぜいモンテーニュぐらいのものでしょう。それは彼が近代の黎明に立ち会いつつ、その夕暮れをも予感し得たからです。遠く滅び去った古典古代への造詣と哀惜がそれを可能にした。

抽象的な言い方をすれば、それは「成り終えたもの」がどうなるか、という問題です。そこにおいて究極的な形で倫理が問われうる。そこにおいて初めて成り行くものの成り行きの総体を見渡すのが可能になる。「成り行き」それ自体には倫理など無いのです。

文明を思考すること、そのあるべき未来を構想すること、それには文明の衰退と滅亡が避けがたいことを覚悟していなければならぬ。プラトン、ひいてはソクラテスが偉大だったのは、かれらが滅び去った数々の文明について知悉していたからです。かれらはギリシャが滅ぶとしたらどのようにしてかを予覚していました。

ホワイトヘッドが文明を決定づける5要素として「真理」「美」「冒険」「芸術」「平和」を挙げたことは有名です。しかるに、これらを字義通りに受け取るだけでは彼の真意を見逃すこととなります。真理の対極には虚偽が、美の対極には醜が、冒険の対極には停滞が、芸術の対極には気晴らしが、平和の対極には戦争があるはずです。その両極を見なければならぬ。むしろ文明は悲劇的終焉を運命づけられている、というのが彼の本音であり、1933年に一般向けに書かれた『観念の冒険』では（示唆はされるものの）そこまで身もふたもない話はしていない。

第2次世界大戦という「世界最終戦争」を経験した私たちとしては、むしろホワイトヘッド文明論を逆向きに読まねばならないのではないかと。私たちはなぜ真理ではなく虚偽（フェイク）を好むのか。美と醜の見分けがつかないのか。冒険をしようとはせず、停滞に甘んじるのか。なぜ芸術が衰え、大衆的な気晴らしやサブカルチャーがこうも世界を席卷するのか。平和の美名のもとに、なぜ戦争がくり返されるのか。

ちなみに映画監督ゴダールは、あるインタビューのなかで「われわれはなぜ金曜の夜に、つまらないハリウッド映画を見てしまうのか？」という問いを投げかけています。ゴダール映画の魅力は、こうした冷めた認識に由来するのでしょうか。

ウソ、醜悪なもの、社会の停滞、大衆向けカルチャー、戦争。この5要素こそが現代文明の本質を成す。むしろ私たちとしては、その現実から出発せねばならない。それこそが具体的にものを考えるということです。

すぐれた経営者は誰もがこうした消耗させられる現実、端的に「頑固な事実」に日々向き合っているに違いありません。しかるに経営学はどうかと言えば（そこに経済学を加えてもいいでしょうが）、私の知るかぎりではたんに「知らんぷり」しているという印象である。

**

私にとって「哲学スル」とは、こうした現代文明の構造ないしその症候を分析し、解明す

ること、可能なら是正することを意味します。その意味で哲学は、それ自体が1つの文明論たるべきだ。とはいえ、それは人類文明全体の動向に棹差すものでなければ意味をなさない。知の最も深い位相に降りて行く必要がある。

いま私は、秋のホワイトヘッド学会のために「数・空間・イメージ——ホワイトヘッドとベルクソン（仮題）」という論考を用意しています。

ホワイトヘッドは『過程と実在』で "spatialization" という語を連発し、ベルクソンを批判しながらその典拠を一切示さない。ベルクソン自身はこの語を用いたことはなく、フランス語にも一対一対応する語句はありません。

思えば空間とは一定の閉じた箱型の形状だから「空間」なので、時空が「空間化」という発想は異常とも言えます。この概念が生じたのは恐らく20世紀初頭の物理学革命からでしょう。今なお決して一般的ではなく、アートや建築、文化理論で使われているにすぎません。ホワイトヘッドがどんな文脈を念頭に置いているか、こちらで正確に限定する必要がありますが、そんな試みはなされて来ませんでした。

ベルクソンは特に空間化を批判しようとはしていません。むしろ空間化は自明なことで、それ以前の幾何学や数の起源の問題を『時間と自由』は扱っていた。なのに彼が空間を批判し、時間のほうが本来的だと主張したという神話はいつ生まれたか？ 私が思うに、諸悪の根源はハイデガー『存在と時間』の註にある。そこで彼はまさにベルクソンが時間を空間化したと、あらぬ批判をしているからです。

『時間と自由』を普通に読む限りでは、純粹持続に還帰することで本来的な自由を取り戻すことに主眼が置かれている。それを妨げるのが物質性であり、否応なく自らを記号化してしまう思考の原罪性である。なのに既成の哲学史や思想史において、同書が時間と空間の関係を扱うマッハ流の認識論であるかのように単純化される傾向がある。

「空間化」にもっぱら拘っているのはベルクソンではなく、むしろホワイトヘッド自身です。それは彼が、自然と人間の二元分裂の克服を宿願としていたからで、そこで不可避に生じる空間化こそが彼にとって最大の難関であり、この難題を知性を以て切り抜けようと再三企てていました。

その根底には恐らく幾何学と代数学の統合というホワイトヘッドのヴィジョンがあります。かれの考えでは空間の空間性と、数の数性は本質的に異なり、この違いは乗り越え不可能です。幾何学もまた完全に抽象化された空間を扱うかぎり代数的に処理できる。とはい

え、幾何学がどうしても振り捨てられぬ残像があって、それが「例」(example)だと彼は言います。実例なき算術はほとんど考えられない。そして代数以上に幾何学において「例」が重要なのは言を俟たない。

ホワイトヘッドが空間の空間性と呼ぶもの、「例」の還元不可能性で見なすもの、それは実際には場所なき場所、像なき像である。高度に抽象化された学の背後に潜み、通常ほとんど意識されぬものの、にもかかわらず知性に付きまとう残像——生き延びるイメージが存在します。

『数学原理』の企てを放棄し、以後アメリカで哲学教授に転じるホワイトヘッドは、空間の空間性という問題、「例」の問題を独自のやり方で追求して行く。そして、それが『過程と実在』における壮大な形而上学として結実することになります。

幾何学に還元不可能な、イメージの場所なき場所。『過程と実在』は、これを「緊縮場」(strain-loci)と呼ぶ。私の考えでは、感情を帯電する身体が、緊縮場において幾何学の原型ともいうべき図式に基づき変様を遂げ、これが知覚の器になると考えられる。

それは幾何学の起源であるとともに、代数学の起源でもある。また主語—述語関係を創始する命題化ないし言表行為の起源でもある。知覚の様態が文明の基礎を決定づけているとすれば、それはあらゆる「公的なもの」の起源でもあるはずだ。この意味での公的なものと《私》の関係をどう考えるべきか。ホワイトヘッド哲学の最も晦渋で曖昧な領域に私たちは足を踏み入れています。ホワイトヘッドもベルクソンも敢えてその語を口にはしませんが、それはまさに《法》の起源でもあるでしょう。

前年のホワイトヘッド学会でも扱ったこの問題の解明を、フッサールの算術の哲学をも参照しつつ、秋の発表ではさらに深めて行きたいと私は考えています。